

R 40.25

3 of 5

\* TESSAKU, TESSAKU SHA, Vol. 3, 1944

67/14  
C



COMMUNITY ENTERPRISES  
MAGAZINE SECTION

# 鐵 柵

第

三

杉原信雄

1944





登頭言

修身教室

つまらぬもの

短 高原

歌 鉄柵  
隔離所宵詠

投稿と編輯

史實を探ねて

感傷

湖底吟

壇 廢園の像

火影

文化寸評

俳句

作文集

創作 三週間

出版前後

時代

編輯後記

井 高之雨 二

加 川 文一 六

泊 良彦 一四

森 本 田鶴子 一六

仁 熊 登美子 一七

伊 藤 正一 一八

山 城 正雄 二四

高 井 有象 一〇

植 川 清 一二

加 川 文一 三〇

山 城 正雄 三二

坂 本 生 二四

三 八

水 戸 川 光雄 四二

廣 小 路 敏雄 五二

樋 江 井 良二 六二

七 〇



# 卷

# 頭

# 言

キヤンプの中を歩いてゐると、子供が頭を下げてよく挨拶してくれる。子供の頭が自然に前に折れるのを見ると、可愛い気がしてくる。

一度、十太位の子供に顔を覗かれて、「良いお天気ですね」と言はれて驚いたことがある。巫山戯けて言つてゐるかと言へばそうではない。眞面目に言つてゐる。そして確かに良いお天気である。空は晴れて、麗かや、鷗も飛んでゐる。良い天気なら、子供らしくマーブルでも遊んでゐればいいではないかと思ふ程の不自然さをその子に感した。十太そのらの子供が何も天気を気にする必要はない。子供は子供であつた方がいい。慌てて大人になるための稽古をし、結局「年取つた子供」にしかたない。

子供の愛らしさは、保護を受くべく自然が與へた美しさである。大人となり、生理的に完成すると、異性を戀くべく可愛らしさの變りに美しさが出てくる。その美しさを求めてお互の人生を豊富にする爲に、良いお天気ですねーも結構だ。純眞で、天真爛漫な天性があつてこそ子供は尊い。今日は——で澤山だ。

キヤンプで皆が同じやうな仕事をして、同じ給料で同じやうな生き方をしてゐるのを、學問や智識がものを言つてくれない。其處で子供も一人前を主張したかも知れないが、個人の有つ脳味噌だけでは如何なる時代と環境にあつても平等ではない。大人は大人であり、子供は子供である。



# 教育

## 雜感(一)

### 修身教室

井阿之雨

この方法が新しい発見と言ふのではない。又この方法が他の方法に比較してより効果的であると主張するものでもない。唯、一つの試として得た結果を發表して見たいとある。それも一個人的な辯明として響かないだらうが——充分に時間を費すことが出来ないで不完全のまま發表するものである。

斯うした試の結果がよかつたかどうかは證明し難い。しかし、さう言へば、我々が小學や中學で教えた「修身」がどれだけの実践的な修身になつたか證明し難いものである。寧ろ、天下りので、乾燥無味をつたと言つて方が正道な印象であらう。いはゆる校長先生の修身と、この方法のどちらがよりよき実践的な効果を齎すかと言ふことも學科の性質そのものからして證明出来ないものである。と言ふのは、倫理や修身は自然科學とは性質が異り、又その効果は生徒の一生涯に亘つて働きかけるものだからである。

しかしながら、修身の科目が學としての倫理學とは異つたもので、實踐に重きを置く課目であることには論議の餘地はない。

實踐を考慮に入れた習得上の効果から言つたら、心理的に觀て、從つて教授法の上から言つて、出来るだけ生徒自ら感じ、自ら考へた行の掟をつくる創造的な



方法によるべきであらう。この点に中心を置いて、生徒自身をして考へしめやうとするのがこの方法である。人のためを教ふよりも、自分達で考へた當爲の提によりよき実践が伴ふものぞといふのがこの「修身教室」の假説である。

## 實 驗

題 清潔

學級 第四學年（夜間）

生徒数 十六名

年齢 ハイスクール上級生より二十三四才まで

提題——（教師）せいけつについて作文を書いてもらひます。一週間上りますから、その間によく考へて書いて下さい。作文と言つてこれは特別の作文で、修身の作文です。それから内容に注意して下さい。同時に又キャンパスの生活に關係のあるやうなことを、例へばお便所はうしろと清潔にできるか、食堂の清潔などはどうかとか、何か具体的に——コンクリートな——ことを書いてもらひたいのです。「清潔とは何か」ともつかしく考へると書きにくくなりませんが、何か実例について書いてもらひたいことを求めます。

皆さんの作文が集つたら、その中のよい英を一纏めにして綜合作文——コムボジット・コムボジション——にします。

綜合作文 清潔



「収容所の様なせまい所にすんでゐますと、清潔といふことは大切な事を御座います。皆がかまはず何處でもよこして置きますと、どんな病氣でも引き起します。もしも不清潔の爲にキヤンパの人が皆病氣になつたと云ふ事があつた時は始めて清潔の大切なことが分ります。」

「私達はなせ清潔にしなければならぬでせうか。一番大切な事はけんかうといひせいと思ひます。えいせいの悪い所で暮してゐる程よく病氣をします。(このキヤンパ) 一番目にかゝるのは洗濯場です。此處の水はかう水ですから洗濯石鹸を使つても着物がきれいになりません。洗濯する所には栓があつても漏るやうな栓を、又無い所が多く……」(そのために床が不潔なのに漏つた汚い水が流れ出るパイプのつけどころが悪いのをなほ更不潔です)

「人間の清潔の心掛がないと、家の外や庭園ばかり美しくしてゐても何にもなりません。之は金持が物のいゝよごれた着物を着てゐていほつてゐる事と、びんぼろ人が古い、きれいに洗つてある着物を着てゐるのとおんなじ事で御座います。」

「家の周りに材木の切り屑やキヤンの使ひかすが投げてあります。冬になるとそのキヤンの中に雨がたまり、材木は雨にあたつてくさつて仕舞ひます。するとキヤンの中には長い間経つと蟲などがわきます。その虫が卵を産み、間もなく何千何万といふ虫が出来るのであります。もしもそのキヤンや材木がちゃんと揃へて片附けてあれば虫のわく事も少ないでせう。」



「他のセンターでは大抵多くのさうぢ人が使つてあります。アカンサスでは會堂のジヤニターでも五人居ますが、此處では一人しか居ません。庭さうぢ人も向ふではフラツクに二人づゝ居て毎日の如くごみくづを拾つてとゞもきれいにしてあります。此處ではフラツクさうぢ人と言つて別にないので大變庭がきたないと思ひます。」

「オードに二三人でもよいから毎日さうじして廻られたいと思ひます。又それが出来なかつたらブラツク マネジヤが一月に一遍でもよいから皆とおさうぢをきれいにしたいと思ひます。私共が一緒になつてすればなんでも出来ないと

は御座ひません。」

「さあ會堂をきれいにしておきませうと言つても一人では出来ません。會堂、洗濯場とふる場は皆の所ですから、一体になつて皆が手傳ひをしなければなりません。一人が良くなりやうと思つても、外の人がよくしたら、又同じやうになつてしまひます。」

### 附記

「内は原文のまゝ……（ ）内は内容をとつて原文を少し變へたもの。生徒にも教師にも最初の誠だったので、出来上つたものは修身か作文かわからないやうなものと言ふことが指摘されるだらう。綜合作文を生徒に讀んできかせ、後に修身教科書から採つた日本人と清潔を説明したのだが、作文を後にした方がよかつたかも知れない。人口稠密な社会生活に於て最も大切なことは共同一致の精」



神である。だから出来上つたものを生徒に發表する場合にはさうした気持の現はれてゐるところには特に力を入れて説明した。綜合作文は教師の方やつとつたのだが、生徒の中から委員を選んて委員に作らせるのもよい方法であらう。

## つよらぬもの

加川 文一

去年の暮れに此のキャンプに移されてきたとき意外に思つたことは草木らしいものゝ見當らないことであつた。どちらを向いても、なをツひろいばかりで、茫漠として、緑のつくり出す興行がなく、凡そ掴みどころのない土地のひろがりであつた。私自身が粗野を、まじまりのない人間なので、その故か私は最初から此處の埃っぽい風景が気に入らず、苦もなく逃つてしまつた。自分の姿をそこに没入させることが出来た。思想的な意味がらばかりをなした、何ぞか自分の来るべきところへきたといふ處を深くし、荷物といひたり、板切れを拾ひあつめてきて椅子とかテーブルないを作りなが





らも、自分なりの心の落つきを廻つて物ごとをなしてゐるものと、快味も深みも胸の底で味つてゐる。

が、それは兎に角として、ツールレーキに草木のみどりと水がなく、野に見るべき花がなく、甚だ自然の美に缺けてゐることだけは事實である。マンザナでは風のない日には、つれづれの儘に婦人や老人までも、彼方の木陰、こちらの草原と、思ひおもひの場所に晝寝を立てかけて、自分の見た自然の美しさを少しでも零すまいとする素人らしい丹念さを繪筆をばこんでゐるのが散見されたのだが、此處では外に出て歩いて、つひさうした光景に行きあたることがない。畫となすべき對象がないからであらう。俳句や短歌を詠んでゐる人もその点で甚だ不自由を感じてゐるのではあるまいか。自然との深い交渉の中に自分を探り當てることを傳統とした日本人の藝術である俳句はもとより自然を生命としてゐるし、短歌も亦その創作の上で自然の美をゆたかに攝りいれることによつて作品の奥行きを整へてゐるかに見える。自然の美はそれほど私たちに缺くべからざる生活の滋養物となつてゐる。

だから自然美に恵まれることの妙いツールレーキはなんと言つても物足りない。勿論ツールレーキにも自然はある。自然のあるところに美が潜んでゐない筈はない。それを汲み上げるのは實にかゝつて人自身にあるのであらう。此處では私たちの抱いてきた自然美に對する概念だけでは最早や充分に役立たない。下手を



すれば、それはわびの悪い白粉を使つたときと同様な結果をもたらす誤れがあるからである。ツールレーキの無表情な地面を、荒れ果てた野の起伏を、低い荒山の情けなさを眺めてみると、それらのものはまるで見當ちがひのところから私たちの心の在りどころに迫つてくる。栗色の鏡重きで私たちの眼から何ものかをしぼり取らうとしてゐる。明け暮れそれが繰り返され、執拗で、しかし何處を押もていいのが判然と知れない疼痛に喰ひ荒されながら、私たちは生きてゐる。

確かにツールレーキの自然は私たちを抱いてゐる美の固定觀念に抵抗し、私たちに向つて更にちがつたものを求めてゐる。此の喰ひ違ひを如何に處理したらよいかであらう。私は最近泊良彦氏の次のやうな歌を見せてもらつた。

天井より垂れて揺れある蜘蛛の子にためらふごときひとときは見ゆ

といふのであつた。多い人の中には此の歌を見て、『なんだ』と思ふ人も或はあるかも知れない。しかし私たちはこの『なんだ』と簡單に片づけて了ひやすい、一見つまらぬものの裡にこそ自分が現在把握してゐるものより一歩すすんだ價值の世界を突きとめることが出来るのではないだらうか。少くとも、そこに眼ぼしい、何ものもありさうにないツールレーキの自然を、その一角から噛みくだきつつ自分のものにしてみえかねばならないとすれば、此の如うな度しい、しかも緊密で強靱な自己の裏打ちによつて固められた詩境からではないかと思はれる。此處には自然の一小部分に向つての作者の地味な自己傾倒がある。地味な自己傾倒の作用によ



つて解放され、解放されることによつて價值づけられたを自然の息づきがある。

句論歌はどこまでも歌であり、自然はまたどこまでも自然であることにかはりはない。歌と自然とは同じものではない。このことは、だが次のやうに言ひかへることも出来る。『自然は大きい』と。歌によつて捉へられたを自然は其の歌の作者の自然であり、俳句によつて捉へられたを自然はその俳句の作者の自然である。歌も俳句もできない私たちが見た自然は私たちの見たまゝの自然にすぎないもので、是も決してありのまゝの自然ではない。私たちの『見たまゝ』とは、私たちの限界を意味するもので、直ぐ目の前にある自然でありながらそれは既に自己と言ふ一個の制限に當嵌めて切りとつた風景であり、署名がしてない自作の風景画である。このことからしてツールレーキの自然はやはり私たちの自己表現でもあると言へるし、自分たちの心の現れであると言ふことができる。従つてツールレーキの自然美をとるに足らぬものと断定してしまつたとき、私たちは實は自分の創作をとるに足らぬもの、つまらぬもの、と断定したことになる。自分のものを『つまらぬ』とするのは大抵は謙讓なところの現れであつて、つまり當り前のことを言つてゐるにすぎないわけだけれど、此の場合島渡おかし氣がする。あまりうがちすぎてゐるかも知れない。



# 感傷

キヤンテンの前で  
黒いターペーパーに寄つて  
一本のソーダを少しづつ飲んだ。

道路の上は

白い靴

赤いバンダナ

五目縞のパラソル

その向ふに煉けた平屋建のバラック。

瞬間と

喜びに生きることは尊いと言ふ。

然し僕は男であつて

若くして

え、獨り者なのだ。

高井有象





## 六月の柵辺

押せば倒れさうな  
ひくいフエンスだが  
巖として國境線ぞ。

その向ふは自由な世界  
のびたアルファファに  
雲雀がないてゐる  
くづれかゝつた英國式の農家に

細い煙が見える。

今日も亦風になるのか  
小裾を灰色の霾風ばいふうがつたはり始めた。

北加州の夏は  
まだ／＼遠い。





湖底吟

嗚呼

誰言ひけむや

國破れて山河在りと

貝殻の丘に貝殻にもつれ

白い白い秋風が吹く

哀れかにかゝるに

われ生命ながらへ

植川清





その昔<sup>カミ</sup>インデアンの戦の跡  
山河いそぐらに新なり  
星空隈もなく  
嗚呼配所の月は――

潮騒か湖鳴りか雄叫びの聲  
誰か運命をトせん  
放浪の詩集に  
旅愁のみ残るは――

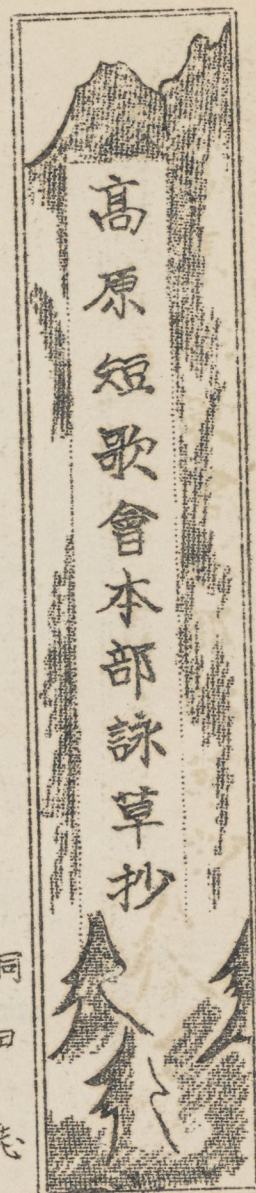
嗚呼

誰言ひけむや

國破れて山河ありと――







高原短歌會本部詠草抄

啼く聲に眼凝らしくみれば見ゆ夜空に白く群れ渡る雁(スーギース)

桐田 志づ

渡辺 あい子

思ふがまゝに物言ふ兒らのふしに心ひかれて思ひ見むとす(幼稚園)

仁熊 登美子

あけ近き月照り澄める荒原の静寂の底に蛙なくさこし

上村 比呂子

柵いくつ隔てゝそれと見わけつつ互みに天と手を打ち振るも(夫拘禁中なり)

岩本 志満子

昨日より揺られ来し汽車の窓染めゝ野木葉に落つる日は耀へり

(移動途中バース・フィールド近く)

入江 千得

わか頭も春の陽うつけとぶ鴈赤き水掻っぱらかに見ゆ



來む夏も眺めむものど去年植まし花は見拾て移るべくなりぬ

望月 楨子

面會の望みも難きを知りにつつ別れの言葉いふは悲しむ

川崎 富子

トラクターは向を渡へたり畠遠く機関の響が一際高し

中馬 逸男

同胞が牆にせめあふありさまをまさ眼にみたり此の隔離所に

宮村 一雄

歸国後に妻は娶ると友の言へど三十路を過ぐれば落りつかぬらし

橋本 京詩

埒なき友とわかれとのいさかひを先輩の聞かして打ち笑みをまふ

吉松 博志

わが悲ふは生みの母ならぬ育てのおや歸にいまへむ日をここに待つ

神本 哲美

白雲の淡くとざれ行く窓のガラスに視線を据ゑて思索す



水まけば土うるほひて庭畑に二つ葉一本あらはにぞ見ゆ

山内 曾六

村上 正男

豆大の雹に打れて飛が雁の一羽目にたつ列を離れて

綾織 謙介

爲すなきをわれ人とも怪まずかゝる安易は憂ふべきかも

加川 文一

きろきろと飛びゆくバツタ眼に追へば翅青く透きて遠くはとほず

矢尾 嘉夫

風荒れし夕べさ庭の夏草が葉蔭にひそむ蠅を見にけり

泊 良彦

二萬人群居の晝巷チヤタゆけるとさ心孤獨に徹せむと思ひき(事に觸れて)

## 鐵 柵

森本 田鶴子

垣越さは咎をも受けむ身と思へこゑを歩む春の夕野を

セーザ野のま中に佇ちて夕光を惜しみるにしかうつしみあはれ



大病むと誰の告げむ憲兵ら三人來りて連れ去りにける

戦にいゆく弟よ小包を送り來りぬ遺品の如く

この國に捧けし命と思へど征く弟の身をあはれめり

## 隔離所朝宵詠

仁熊登美子

ひと一人殺されし事件の真相ニトがまちまちなるまま過ぎんとすらし

(國本青年射殺事件)

こゝろひくゝ孤所の理由を言ふ人の憶づるらしきに評が下多きは

擴聲器一ぱいに出づる号令は曉あけをしづけき山に飢す (ヲダオ体操)

溜りたる仕事思へば落着かぬ身を起さ出でつればかどらなくに

風あるし空にしまらんたけたひし一列の鷺向むきかへにけり

水無月の月の夜頃を蛙子はこゑのさやかに鳴き明かすらし



随  
想

## 投稿と編輯

伊藤 正

15

あちらこちらでセンターで発行されてゐる文藝誌にも、それぞれひとつのレベルといつたやうなものがあつて、そのレベルをある程度まで保ち、より良きものに成長させるためには、投稿家の佳き作品に俟たねばならないのはいふまでもないが、ひとつの文藝誌が世におくられたされるまでに拼はれる編輯者の並々ならぬ皆心と努力とを忘れることは出来ない。

自分は投稿家に属する人間だから、先づその方面を主として書いて見たいと思ふが、原稿を渡す時に私がいちばん気にかゝるのは、自分の書いたものがボツになりけしなやかと云ふことではない。勿論自分の作品が一つもないために肩かごに投下されて顧られないといふことは寂しいことには相違ないが、自分にはいふものを吐き出す訳にはいかないのだから、諦めはつく。絹を吐くのは蚕であつて、毛虫には毛虫だけのものしか吐き出すことは出来ない。俺が吐き出したの付だしかに絹だったはずだ。などと自惚れる毛虫があるとしたら惨めだ。自分が毛虫であることを寂しくは思つてゐる私は恥ぢはしないが、絹を吐いた筈だといふ毛虫の優越と自惚れからだけは救はれない。私は常にさう力めてゐる積りである。では、投書に對していちばん気がかりなのは何であるか。自分の作品が不情を



もつて發表されることである。ボツにするのも可愛想だから、といふ編輯者の同情である。折角頼んをのだから、といふべづかひは有りがたいが、その氣もちで、投稿したことに對する酬ひは充分である。その先は、『もつと佳いものを書け！』といふ言葉が欲しい。同情が誌上にまで延長されて、反古籠からのこの這出した作品が、片隅に小さくちぢまつてゐる姿は惨めでもあり、考へて見ただけでも穴を探しそくなる。それと思ふと、投書する勇氣が挫かれてしまふ。これは私ばかりではあるまい。

私は發表されることのみを唯一の目的として、ものをかいてゐるのではない。私がかうして下らないものを臆面もなく發表するやうになつたのは、キヤンプにはいつてからのことであつて、それ以前にも私はながい間ひとり何か書いてゐた。氣まゝに書きたいことを書いて、勝手に楽しんでゐるだけのことである。勿論、よき發表機關を持つことは大切なことであり、ひとりでも多くの人々に讀んでゐらつて、よき批評を與へられることは文學修道者にとつて大きな喜びであるのは云ふまでもないが、人に讀んでゐるやうなものを書ける自分でもないことを私はよく知つてゐた。私はこれから文學に志してそれで一生身を立てようなど言ふ年齢ではなし、自分にその天分のないことも承知してゐる。私はただ、自分だけのものを吐き出したいと思つてゐる。自分の力だけのものを吐き出すことによつて、何か眞実なるもの、永遠なるものの幻影にでも觸れたいと願つてゐ



る。私は一生がかって、絹を吐き出すことは出来ないであらう。だが、私は私なりに、毛虫は毛虫なりに、許された世界に眞実を求めて、自分に吐き出せるものを吐き出して行きたいと思ふ。それが文學を愛好する私の道である。

『鐵柵』の創刊号に、私は小品、『狐』と、『裸の言葉』を投稿した。『狐』は野澤さんに絞め殺されて、燃へさがるストーブの中にたたき込まれてしまった。無惨な最後をとげた『狐』を思ふと不憫でならないが、野澤さんにしては食べるつもりで絞め殺したのではなく、私を生かすために目をつむつてやつたことなので、『狐』もストーブの中で静かに成仏してくれたものと信じてゐる。『裸の言葉』は素裸にされて、危く鐵柵にぶら下がつて寒い風にさらされてゐる。今に落つところはしないかと、見ていて私は気が氣ではない。

第二号の原稿は、鹽想『資格について』と、『水の甘さ』を河合さんに渡した。いゝと思ふ方を出して下さい。両方ボツでもかまひません』と私は思つたままを言つておいた。河合さんは私の『水を持って帰つて、門口にぶち撒けてしまった。おんなまづ水なんて飲めやしない。うさつた濁酒の方がよっぽどましだ。』と後で聞かされた時、誰にも味ききさせないで、飲んでしまつとけばよかつたと私は思つた。こんどいい濁酒ができたなら、誰によりも先づ河合さんに一杯進ぜようと思つてゐる。二号には『資格について』の答であるが、その資格があるかどうか。火に炙られたり、門口にぶち撒かれたりすると、自分の貧弱さがまざまざと感



じられて、寂しい気がするが、それがそのまま發表された場合を想像すると、救はれたやうな明るさを感じる。そしてホッになつた作品を色々と検討して見る時、ホッになつたこともあながち無意義には終らなかつたと感じられるのが悦しい。私は發表された作品よりホッのまま葬られた作品に對してより関心を持つ。その中からより多くのものを學び取ることが出来る、私は信じてゐる。投書した作品が發表されないからと言つて、悲觀し過ぎたり、誇を傷けられてもしたかのやうに編輯者を恨んだりするのは、もつての外だと、私は始終思つてゐる。自分には自分だけのものしか吐き出せぬのだ。その自覺が大切であるし、また自分は自分だけのものを吐き出してさへ居れば、それでいゝのだといふ氣にする。絹を吐くには先づ蚕になることが必要である。毛虫から蚕へと、生涯を通じて撓まざる精進をつづけて行く道程こそ、尊いのだと思ふ。つひに毛虫となつて終つたとしても、自分に天命がないのだから、仕方がないではないか。

三戸川さんがある若い人に『鐵柵』に何か書いてくれませんかと言つて依頼したら、『出してくれることが決まつてるのなら書かう』と答へたといふが、私にはさういふ自信は持てない。その十分の一の自信が持てたら、私もこの年までにはもつと何とかなつてゐたらうと思ふと、ちよつと羨ましい氣にする。一生自信の持てない男として終るのかと思ふと寂しい。君がい人達にとつて自信を持つことは大切なことであり、その中に明日の成長がひそんでゐることも事實であるが、



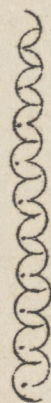
自信は應々にして自惚れと紙一重だといふことも、心得べきだと思ふ。

最後に編輯についてひとこと觸れておきたいと思ふが、かつて編輯にたづさはつたことのない私には、その苦勞はまた想像の範圍を出ない。依頼した原稿をやむなく没書にしなければならぬ場合が、何よりの苦痛であるらしい。折角書いてもらつたのだから氣の毒だ、といふ氣持が強く働くのは人情として無理からぬことであり、そこに愛情の美しさが感じられるが、單なる私情に囚はれてその作品を發表したとしたら、それは作者への侮辱であり、同時に編輯者自身をも汚すことである。ボツにするのが氣の毒なら、それを發表するのはなほさら氣の毒ではないが、侮辱ではないか、と私は思つてゐる。あまりに神經質だと非難されるかも知れないが、この問題に關する限り、私はのんきではゐられない。編輯者としては、佳いものが出て来るまで遠慮なく書かすことであり、投稿する人からは、それにへこたれ、ないだけのず太さと、情熱と、努力とを持つて、書きつづけることである。『鐵柵』は發表するための機關でもあるが、それ以上は、書くための機關だと、私は思つてゐる。發表することより、先づ書くことだと私は言ひたい。そして私も虫出なりに、絹を吐く白を夢想しながら、書きつづけて行きたい。

『原稿は一應、加川さんに目をとほしてもらつてゐます。』と野澤さんたちは言つてゐたが、ツールレイキに加川文一氏を持つことは、ひとり『鐵柵』の誇りであるばかりでなく、吾々全部の喜びである。



とりとめのないことを書いてしまったが、さて、この原稿を、第三号の編輯をやる山城さんは、素気なくボツにする気が知ら……？ 『こんな樂屋はなしみたいなもの、ごめんだよ』——眼鏡の奥で鋭く光つてゐる山城さんの瞳が、強く感じられる。



——田・田・二九——

序だから書んが、我々が「鉄柵」を永續せんと希望する限り、掲載すべからざる原稿——例へば、政治的なもの、日米戦争を批判的に書いたもの、又当局の政策に對して不満を訴へたもの——は假令如何なる名文佳作とも全部ボツにすることにしてゐる。我々はキヤンズと云ふ鉄柵の中に在り、嚴重に監視されてゐる。自己のかゝる環境を認識する事は普通の常識さへあれば何等の智識がなくとも充分であり、「與へられた環境」を善處するだけの常識が苟も筆を取る者には有つて欲しいと思ふ。自分の衣服に火を焚け、墓場に向つて突進して行くのも、退屈勝なギャンブルとは「勇しい」と褒められるかも知れぬが、故国本土を踏む事を唯一の歡びにしてゐる我々はその飛火をすらかぶりたくない。迷惑と思ふのみである。投稿家の中には随分過激なる作品を送附せし人もゐるので、我々の立場を明かにして參考の爲に善く事にした。「鉄柵」の短歌は泊氏に——詩は編輯評選ではあるが抒情詩や歌謡詩を歓迎する。隨筆や他の創作は編輯評選。——自己を過らざる良心的な作品を求めてゐる。宛名は鉄柵社——。——B.





## 史實を採ねて

山城 正雄

「ツルレーキの附近で昔戦争があつたと言ふことを聞きましたか。一度こんな質問を受けたことがある。話を聞くと矢尻を拾つたと言ふ。見ると掌の上に三角形の小石を轉がしてゐる。ツルレーキに来てから四月しかならなかつたし、別にそんな話は聞いたことはなかつた。ツルレーキと言ふ名前も、不忠誠分子を隔離するんだと聞いた時から、頭を大きく占領しただけで、正直に言へばどんな處か知らなかつた。ツルレーキの町と區別する爲に「ニューウェール」と名附けたのも、此處に来て始めて知つたのである。歴史のことについて何一つも知らなかつた。何時か水戸川君が來た時、砂糖がないので珈琲の中に蜜を入れて飲んだ。その時キヤンファのすぐ近くに無名兵士の墓があると言つてくれた。彼は石炭夫として働いてゐるので、何時もその墓を見てゐる。兵士の墓があるとすれば、このキヤンファの附近で戦争があつたかも知れない。面白いことを聞いたもんだと、急にその墓が見たくなつた。見たいと言つたら、では連れて行つてあげようと約束してくれた。



鐵道線路がキャンパの中に入つて来る處に門がある。十一月四日の事件までは自由に此處まで行くことが出来たが、今では一部の仕事人しか行かれない。石炭を下しに行く人なら皆この門を知つてゐる。水戸川君にこゝまで連れて行つて貰つた。途中内側のフェンスを潜る時、フェンスの針でパンツの裾を裂いてしまつた。破れたパンツをそのまま一週間もはいてゐたが、縫つて上げようと云ふ親切な娘は一人も居なかつた。自分もあまり氣にもしなかつたが、墓一つ見る代價としては確かに高かつたと、今でも思つてゐる。

門の近くの小高い土手に坐つて、この無名兵士の墓を見た。フェンスの近くまで行かうかと思つたが、憲兵の神経を刺戟するのも本意なかつたので、のんびりとして坐つたまゝ遠くから見てゐた。墓は横に走つてゐる鉄道と道路の真中にある。墓の右手に電信柱が立ち、後方には赤く塗られた鐵道スイッチがある。誰の目にもつゝ便利な所にあつた。墓はセメントで作られ、白くベントされた十字架が立つてゐる。その十字架を横に「無名兵士の墓」と書かれ、縦に「モタツク戦争一八七三年」と印されてゐる。柵外の曠野に眼を移して遠くを見た。兵士の墓があり、戦争があつたとすれば、ツールレーキの近所に矢死が落ちてゐるのも事實かも知れない。だが、この「モタツク戦争」はどんな戦争で、誰と誰とが戦つたんだらうか。面白いと思つたので調べることにした。

翌日、高校の圖書館で歴史の索引を片端から調べて見たが、モタツク戦争のこと



について何もなかった。小規模な戦争だったかも知れないと思った。帰りには組合の図書館にも入って読んで見た。御座いませんと答へた娘の日本語が歯切れよく耳に残っただけで、失望して帰って来た。その後何かいい文獻はないかかと色々考へた。ツルレーキの湖水が一夜のうちに干上った神話や、インデアンの自然児が熱烈な愛を犠牲にして出陣する劇的な場面を空想したりしたが、結局何にもならなかった。

ロス・アンゼレスで學校に通つてゐた頃、太平洋沿岸史を勉強したことがある。別に好きで取つたものではない。太平洋と言ふ言葉が気に入リ、又「真理」に勉めたのであつた。先生はユタヤ人で、父のルーズベルト顯氣であつた。ユタヤ人だからルーズベルト黨と言つたやうな方方は嫌ひだが、當時選挙前であつたので、生徒と盛に熱を上げてゐた。こんな時には僕は何時も窓外を眺めて、自分の魂を樹下に逍遙させてゐた。その僕に「誰に投票するつもりですか」と問はれた。ぼんやりだが市民である。憲法は僕にも投票權を與へてゐた。昔も今も同じことをが、權利を使ふ道を僕はあまり知らなかつた。だが、誰を選出するかと問はれると、同じことだと思つてゐても、先生のルーズベルト顯氣が鼻について、「ウィルキー」と答へた。

カルシウムにウィルキーが大統領候補の演説に來た時、友人に誘はれて聞き



に行つた。屋台を刺つた自動車の上に立つて、ウイルキーは両手を胸のところから空に突き出しては民衆の歡呼に愛想を振り撒いてゐた。一國の大統領になるには、こんな下らない彌次馬にまで媚を賣らねばならないのかと、地位を求める人間の慘めさを感じた。政治家としては偉かつたかも知れないが、ウイルキーにしろ、ルースベルトにしろ、僕の眼には俗人としが映らなかつた。

ウイルキーに投票すると答へると、何故かと又問はれた。先生は僕の無智を冷笑してゐる含み笑さへしてゐた。「ウイルキーが大統領になつたら、感謝祭の日を覺える心配がなくなるから」と答へた。先生は変な顔をした。僕も妙なことを言つたものだと思つた。

頭の組織が結構に出来てゐて、それ以上に来れてゐない歴史の先生は、よく何年何月何日に何が起つたと覺えてゐる。この先生も同じで、生徒が教室に入つて坐る度に、今日は何日ですかと問ふ。何日だと言つて上げると、さて、今日はどんな事件があつた日かなあと、頭を横に曲げる。憶ひ出す爲にではない。ちやんと頭の中に浮いて来てゐることを、その瞬間に憶ひ出すやうな風をしてゐる。氣障でたまらなかつた。一度、「今日はどんな日ですか」と問はれたことがあつた。「僕の誕生日です」と答へたこともある。今でも自分の誕生日以外の何月何日は知らない。知つてゐても仕方がないと思つてゐる。大功な日は新聞や友人が教へてくれるので、あんまり頭を痛めないことにしてゐる。



こんな風であつたので、努めて勉強しようとはしなかつた。落第させられるだらうと覺悟してうんと急げた。不思議なことには確かに及第して少し疲れたと思つた。その後、その先生と逢ふ度に、何か莫大な借金でもしてゐるやうで少し照れくさかつた。その時教科書として使用したのがゴードーの「太平洋治緯史」である。専門以外の本は全部賣り拂つたが、この本だけはもう一度讀むつもりでキャンフに持つて來た。そして一度も手をつけたことがなかつた。偶然かどうかわからないが、この本に「モタツク戦争」のことが少し書いてある。やはりツルレーキ附近で、あの時のインデアンの大將が酋長ジャツキであつたこともちやんと書いてゐる。もう一度圖書館に行つて、酋長ジャツクのことを調べることにした。

春になると荒類<sup>フトナ</sup>の葦<sup>アシ</sup>がキャンフの方々に生えて來た。この葦でインデアンは籠や蓆を作つたり、家を葺いたりしたとのことだ。今でこそ此處は乾燥した湖ではあるが、以前はオレゴン州境を越えて大きな湖であつた。この湖面に生えてゐた葦をスペイン系米語で「カニ」と呼んでゐる。

最初からこのキャンフにゐて、今新聞社に働いてゐる人に何か此處の歴史を知らないかと問つて見た。彼は曰本語も教へてゐたこともあるので、今も時々遊びに來てくれる。此處で戦争があつたとすれば、我々が來ない前に既に新聞で紹介され、彼も知つてゐると思つたからだ。少し聞いたことがあると彼は言つた。そ



れを聞くと、他人に先んじられたやうな究極する人の淋しさが湧いて来た。古い新聞をキープしてゐますと聞きたら、ないと言つた。どんなことが書かれてゐたかと、その新聞が急に見たくなつた。

文芸雑誌「收穫」に戦争前小説を書いてゐた加藤氏の家に遊びに行つた時、古新聞のことを訊いたら、大切な記録になるんでしたら、多分キープしてゐるだらうと言つて、紙袋の中から褐色がかつた新聞を出してくれた。調べて見ると、昨年の新年号に、「昨日のツルレーキ」と題して書かれてゐる。去年十一月四日の事件の傍枕を喰つてキヤンプから去つたジョン・クックが書いてゐた。英文の方にはアムムと言ふ先生が書いてゐた。併し、史実としては抽象的であまりにも食弱だつたし、具体的なものは何一つも書いてゐなかつた。それよりも圖書館で探したパイネ女史の酋長ジャツキが小説ではあるが、もつと詳しいと思つた。併し、これだけの史実で何れも書けない。幾らキヤンプでブラフが効いて、三角形の上三分の一の人間が、僕の書く作品を冷い批評眼を見てゐることを考へると、科学する良心と創作する情熱だけは誤魔化することが出来ない苦しさも意識してゐる。従つて以上ありのまゝをかゝことにした。

ツルレーキの道路に敷いてゐる赤い熔炭石の粉はレバベッドと言ふ処から運んで来る。今は国立公園になつてゐるが、此處に酋長ジャツクと五十人のインディアンは立籠り、米兵数千人と六月も戦ひ、米西戦争における犠牲者よりも多い死傷者を出した。一八七三年のことである。(つづく)



(詩)

# 廢園の像

加川文一

私の前に  
お前の初々しさは剥り出され  
お前は耀く

お前の髪に  
お前の肌

あゝ若きものの  
ほのぼのとした美の奥行きに  
櫻の花びらはちりかゝる

地に落ちる前に

あけほのがしづかに生れるやうに  
まぶしく恥ぢだらひつゝ  
お前の肩は



お前の唇は  
ちりかかる花びらを  
やさしく両側へ汲みすてる

あこがれよ

若き女きのゆめよ

癡園のすさみを

忍びより漂ひよる陰を

お前のやさしい瞳は堰きとめ

ンして

お前の瞳の前に

私は立ち

私は見る

いまの世に見てならないものを

盗み見るかのやゝに

けがれなきお前を



# 火影

山城 正雄

雷もよく鳴り、稲妻もよく光った  
蠟燭の灯が揺れると  
あなたの鼻の影の位置も變る  
静かな良い晩でした  
電燈がぼつとついた時  
後悔に似た安らかさがぼつと胸を打つ  
内気を私でした。

## 結局

ツルレーキのほかに  
行く處のない私でした  
海の彼方の戦争が忘れられ勝て  
ポケットの空になる淋しさもあつたが





結局

歴史の流れ行く淋しい方向へ  
そつと一つの清い道を選んだ私でした。

気候の良いツルレーギにも

停電する静かな晩もある

飲み干された珈琲カップが

長い糸を引いて揺れる部屋に

指の間よりのほろ煙の細さを見て

天使の高さに置いて見なかつたあなたを

淋しく想ふす晩もある

先生と言つてくれた他

何とも言へてくれなかつたあなた

私のみが發見した理智を表清の閃き

冷たく思はれる淋しい晩です。





# 文化寸評

坂本生

戦後 W.R.A が提供する歴史的記録は徹々たるものであつて、我々が如何にして来たかは、眞の意味に於て、傳へてくれるかどうか疑問である。W.R.A の記録は爲政者の行政上の記録であり、従つて客觀的なものであるからである。キヤンフ生活が我々の夢想したユートピアであつたにしろ、自由と束縛された一個の牢獄であつたにしろ、やはり生活する社会であつたにしろ、我々が残すものが史実となるのである。何故ならば我々自身が文化であり、主觀を成してゐるのが我々であるからである。

キヤンフ生活をして既に二年となる。此の二年間、幾人も出生し、幾人も結婚し、幾人も死亡した。そして、我々はやはりキヤンフにゐるのである。口先で日本精神を唱へて居さへすれば、自身が過去に於て何をしてきたか、現在如何なる自己の人生觀を有してゐるか、ある程度まで誤魔化しの効く程キヤンフは結構な所である。勉強しようが、遊んでゐようが、戀愛しようが、確かに本人の勝手だ。だが歴史は公平にして誰の味方でもなく、知らん顔をしてゐる程馬鹿ではない。冷い理性で我々を審判してくれるであらう。W.R.A が如何にして我々を行政したかではない。我々が如何にして生きてゐたかをである。





故国の文化と比較すれば在米同胞の文化は三十年も遅れてゐると、戦前米國訪問の某文學者が言つたことがある。開戦故國との接觸は断絶し、文化はあろか、社会状態の真相すら知る術もなく、三十年どころか、五

十年も遅れた感がある。日本よりの懸問品中、昭和十八年度出版の書籍が二三冊ある。十八年と言へば去年の事だ。何か新奇なものはないかと廣告欄まで眼を徹してみれば嚴重な検閲を経て来ただけあつて故郷の聲の他何も發見出来なかつた。新らしく創作される文芸作品からの孤立は、單に何年間の選延と断定されるよりも、別な意味の孤しさの内在する。例へば趣味や智識の満足が出来ぬと言ふ如き簡單なものでもなく、絶えず物を見つめてゐる作家が讀者に與へるやけり創作してゐる交流感と言つた如きものを——が得られないからである。

斯かる意味に於いて文芸雜誌「鉄柵」の誕生は嬉しいと思つてゐる。何もツルレーキの文化を代表してゐると言ふのではない。時計の長針と短針との相違はあつても、故國の變化と同じ方向に歩調を向けてあり、内容の面でこの間隔を縮小せんとする良心的な動きがあるからである。若し、「鉄柵」の作品が單なる趣味から生れた遊戯や作文程度の芸術であれば、キヤンパではこんな筆をしてゐたに「鉄柵」を日本に持参して行く心算だけは置いて行つて貰ひたい。「鉄柵」のよさは他の雜誌と比較してある程度のレベルがあるからである。大衆に媚びてこのレベルを下げることは、眞實に生きんとする人間の恥辱である。



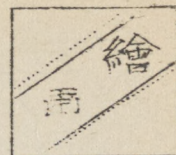
# 演劇

個人の立場からして僕は大和座の渡部白楊氏の芸が好きである。氏が嘗て早川雪舟や上山草人と共に舞台稽古をしたと云ふエピソードを聞き知つたからではない。やはり氏の持つ真面目な芸道観である。

何時か「女房心得帖」を観た事がある。主題は嫉妬で喜劇であつたが、冷酷な妬に虐待される従順な嫁の感情の纏れをよく表現して、喜劇を單なる喜劇として終らせず、人間性の深い悲哀を底流させた点など、実に巧いと思つた。舞台と觀衆とのソシオ・メハニカの力を持つのも氏の芸に好感を持つてゐる。

大和座が山本有三の「嬰兒殺し」をどの程度まで踏みこむか興味を持つて觀た。戯曲の中で菅屋が出てくるのは、素子に近かれた巡査の境遇を説明する爲であり、隣家の女房の登場は女土方が嬰兒を殺さねばいけなかつた窮乏な社会状態を説明する爲であり、この危機から危機に移る段階が充分に生きてゐなかつた感があった。高野代の台詞も一本調子であり、常川代の巡査も同情と職務に對する板挟みの心理が貧弱だつた気がする。文芸作品を題材にした爲に、文学上の見地から批評する嫌味はあつても、人生の再表現の長よりから考へても同じ結論にしか達せられない。自分の演ずる人物の性格を明然と掴む事が大切と知つてゐてもそれを表示出来ない處に芸の蘊奥がある。併し、僕は渡部氏が何時か大和座を完全なものにすることが出来ると信じてゐる。もう舞台に上らないと決心しても、氏が出た方が皆の研究になりはすまいかと思ふのである。



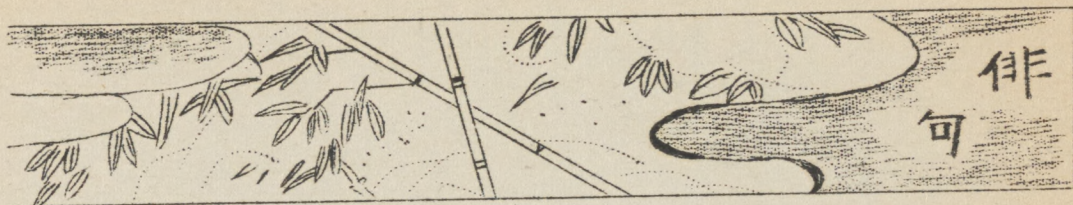


絵画展覧會はどうだつたかと言はれると、確かに良いと思ふ。佳いのがあつたかと問はれると、それが問題だと思ふ。たとひ佳作があつたにしても、僕の鑑賞眼が低俗で、佳いくと褒めても何もならない。芸術家は最初からオベツカを嫌つてゐる。正直な適評をしてもらひたいのである。

展覧会で作者の作品を一處に羅列すると、その作者の特徴が明然と判つてくる。南画と洋画との調和を試みてゐる本田氏の作品は佳いと思つたが、物象の輪郭をデテイルに過ぎすぎ、両者の氣韻と象徵を崩してしまつた感がないでもない。森本氏の靜物に對する映光は特徴があり、氏のアブストラクシヨンが消化されて巧みに生きてゐる。坂氏の作品は色彩がぱつとして、殊に青と緑が目立つ。部分的には色彩の或す幻想感と言つたものを與へるが、全体はそうでない。小早瀬川氏の油絵は印象的で佳い。田中氏の作品は作者の苦悶までが作品の底に流れてゐる。以上は精一杯の批評で、芸術と友情との中間に立つて少し足掻いて見た。

画家程キャンパで地味にコッ／＼生きてゐる人種はない。時には展覧會に出品しても、觀客には夜店を冷すやうな態度でゐるりと歩いてしまふだけで、傑作だらうが、駄作だらうが、あまり気にしない。ゆつくり觀てくれと用意してゐいたベンチに坐る親切さもない。冷淡である。だから自己の個性を述べ爲にキャンパを利用するのが賢明である。知る人ぞ知る。知らない人は最初から問題ではない。





鮑丘俳句會句抄

北斗星大きく沈み五月闇  
 あか／＼と留守る灯や明け易き  
 短夜の湯殿深れ来る流行歌  
 夏嵐埃の中の月黄なり  
 厨戸にころがる骨や蠅遊ぶ  
 落葉風蒼空ゆる／＼舞ふ鴈  
 五月闇灯さぬ塔のありどころ  
 五月闇折々光る探照燈  
 旋風にうかどとられし夏帽子  
 五月闇カヨテ鳴きつれ柵の外を  
 短夜の寝息かそけく笑める子  
 果しなきセージの原や夏嵐  
 五月闇硝戒燈まはり居り  
 夢畑や大波小波夏嵐  
 夏嵐後の静けき夕かな  
 野球戦今たけなはや夏嵐  
 賣店に夏帽子と積まれけり  
 麻雀に更くる灯や明け易き

岩下

蘇村

矢野

紫音女

田中

素風

池永

肥州

今村

桃村





草に寝て夏帽頭に冥想す

短夜や人なきミヤワの水の漏り

巡警と行き逢ひにけり五月闇

撒水車急ぎ過ぎけり夏嵐

短夜の床に新しき煙草かな

夏帽や霰をばしる高原地

空低く飛べる鷗や夏嵐

因はれの旅いくとせや夏帽子

短夜や旅愁の夢のさめがてに

駈け脚の子の一隊や明け易き

小走りのをみなに逢へり五月闇

定めなき高原日和夏嵐

前見をづむ自転車の子や夏嵐

あなかしこ御像に蠅のみそかこと

山田如平

山本涸川

大館無涯

森山一空



浴佛の面輪ほのかに晝の燭  
誕生の姿がしこし手彫佛

伊奈 いたる

野火遅々と煙は遠くひろがりぬ  
春暖燼や風邪気味の椅子をよせ

米岡 日章

戸明くれば春曙の家並あり  
定まらぬ日かと思ひつ衣更

高井 丘波

寂靜もる二万のキャンパス月おぼろ  
重なりつれつゝ過ぎぬおぼろ影

中島 一秋

高原や湖に溶け入る春の雲  
春日金やびかひながら遠ざかる

植川 うたを

若菜に脊懸抱いて晝やすみ  
お白粉のはのかなる香や春惜む

大家 雪香

春の日の眼に強ければ籠り縫ふ  
永く日や兒の歩むまゝつさまとひ

小野 百合子

春曉の大踏はろかに真直に  
春雨に眞夜の軒燈ひそとあり

矢成 緑風





高きう風に來きて謎のほり  
梅樹木の芽は幹よりも太かりき

八谷 九峰

草挿んを空の蒼さにひとり居る  
暮の春草の背丈に入る日かな

松下 翠香

文を書く卓灯に遠く春暖爐  
うららかな湯あみの火を横抱きに

小山 さかえ

水仙や朝の目覺めの手水鉢  
丹念に面よりうず種蒔きぬ

近藤 梅香

春灯や衣桁の衣はみんを派手  
夜歩きがたのしくなりぬ衣更

佐々木 民泉

春愁や人の若さのふと如く  
病み暮れし窓春月のあるらし

森本 糸女

春草や地肌も見ゆる若岩  
假住の小庭の蕾夏隣る

毛利 白龍





# 作文集

## 今の私

六年生

松野 薫

私達は此のキャンパスに何の爲に來たのでせうか。今まで一度も考へた事もなかつた私は此の頃こんな事を考へます。勿論日本へ行くのが私の目的です。でも日本を見た事のない私は何時も日本はどんな国だらうかと考へます。何時も人々から日本の話を聞かされると、私達の国は本当に立派な国だと言ふ事がしみじみわかつて來ます。日本人として生れて來た私達はなんと幸福な人種でせう。でも果して何時行かれる事が出来るでせうか。

私が此のキャンパスに來てから半年の月日は夢の如く流れてしまひました。あの住み馴れた此良のキャンパスと別れたあの日、私はどんなに歎き悲しんだ事でせう。兄弟よりも親しく遊び學んだ友達とも、これが最後かと思つた時に、私は泣きたい程でした。でもあの日の事は今では遠い昔のやうな気がします。今の私の氣持はまるでつきり變つて參りました。何時も鏡の前に立つて自分の姿を見る時に、私も本当の日本人だと云ふ氣持がします。いゝえ、顔や姿だけが日本人でなく私の心のすべてが日本人らしくなつてゐます。

私は一日も早く憧れの日本に行くことができたらどんなにうれしい事でせう。一日も早く平和な春がくるやうに毎日祈つてゐます。



## 私達の先生

六年生

渡部 誠也

先生！僕は昨日のあの「大隅のかなた」を讀んで先生になるのはとてもむづかしいと心から思つて先生の話を一生懸命に聞いてゐた。あの「真理の道は尊い、しかし真理の道は寂しい」といふ所が僕は一番好きであつた。實際真理の道は尊いが其の中にも寂しい所、又くるしい所もあると今先生の言つた言葉が思ひ出されて來ます。

先生！先生は僕とおなじブラック、しかもおなじバラック。「お早ようございませう」と今朝僕はいふ。學校でも亦「お早よう」といふ。どこであつても先生とお話をする。話をしなければしんど頭がすこし下る。〇〇キヤンフを棄てて、はる／＼遠い此のキヤンフへお着きになつた先生は丁度あの「大隅のかなた」にあつた先生のやうに孤獨から又孤獨の淋しさの中にやつて來たをけでした。

先生！先生のユニットには夜おそくまで電機があか／＼としてあたりを美しく見せてゐます。僕、先生が勉強してゐるつしやるといつても僕は思ふ。電機がおそくまでついてゐない時などは先生が病氣でもしてゐないかと思ふ。併し、今日先生が學校を止めると言つた時、僕はがっかりしてしまひました。何故先生を止めるのですか。



たより

十八日

上島 恭子

入所以来私達も皆元気で朗かに暮してゐます。お父さんとも無事に会へましたから、他事ながら御安心下さい。

敵国人と言ふ名の下に、途中想像も及ばない程の上等な待遇を受けましたが、此處に着いて青年團や同胞の「愛国行進曲」を歌つて迎へて下さつた時、泣いてしまひました。これも夢となりつゝあります。

此處南端のテキサスは暖かい日和がづきます。オレング畑もあつて、もう青い実がなつて、小島も轉つてゐます。お父さんに言はせると、丁度ハワイの様な氣候だとのこと。私には、夕方の散歩などは涼しい風が吹いて、丁度日本の夜店を歩いてゐるやうな感じです。

初めの二三日はマンザナが悪いと思ひましたが、この收容所の温い感じが皆誰でも日本語を挨拶をして通る事などが、一ぺんに好きになりました。日本人の他にドイツ人も居ます。親しみがあつてよい感じがします。

りっぱなプールもあつて暑い日は皆入つて泳ぎます。青く澄んでゐる水がきら／＼と陽に輝いてゐる中を、嬉々として泳ぎ廻る人々の群を微笑して見ながら、ふと、語り合ふ昔の友のゐないのを他しく思つたりします。紙も手紙も制限されてゐますから、これで御免下さい。





### 三週間

水戸川 光雄

仕事の手を休めて、ふと青空を見上げた時とか、キヤンテンへ貼出した演芸會のホスターを見た時、順一の姿がツーンと胸に來た。そして千代は、一人ぼつあになつた佗しさを感じるのである。それは慥かに正直な千代の氣持であつた。然しその直ぐ後から、自分の安っぽい感傷が厭になつて來て、順一へ對する反撥がムラ／＼と湧いて來るのである。順一と千代は別に申し合せたわけではなかつたが、一週間に一度は何處かを逢ふ習慣になつてゐた。そんな約束を破つて彼は三週間も顔を見せなかつた。特別の事情がある時は、わざ／＼詳しい手紙をも寄越す筈なのに、オレさへもせず、譯の解らない沈黙を續けた。同じ目と鼻の先に住んでゐて、然も彼は毎日ツラツクを働いてゐるのである。その事實はもう動かせない。千代は思つた。二人の間がどうなつたか位は、想像がつくのである。何



改自分から彼を訪ねてみようとしなかったのかと詰問されれば、あつさり、それ程の愛情は持つてゐないと、答へてもよいと思ふ程不貞腐れてみた。如何にも圖太いそのやり口のやうでもあるが、先の見へる、味気ない交際を續けるより、厭なら厭と、明白な區切りを付けた方が、何もかもさっぱりするだらうと思つた。千代らしいテンポの早い解決策であつた。其様に、得手勝手に彼との間を處理しようとする自分に、底知れない嫌惡を感じないでゐなかつたが、そうかと言つて、もう一度彼との縁を戻す氣にもなれなかつた。順一に交際を求めたのも千代ならば、彼を思ひのまゝに引張つて來たのも千代である。それを為て、何處まで行つても一つに落け切れない宿命のやうなものを感じてゐた。彼とは定期的に逢ひ、誘はれ、は何處へでもついて行つた。世によくある、楽しいカツパルに見えたに違ひない。然し互が顔を合せて、笑ひ合ふその向ふへ、ヒヨイと飛越せない何物かがあつたのである。それは順一の性格がなすのか、或は千代の冷い理性に依るのかは解らなかつた。

順一とは南加時代からの顔見知りであつたが、實際に話をし、交際を始めたのは、鶴湖が隔離所となつてからである。各センターから、續々入所して來る人の群に、順一の姿を見つけると、長い間待つてゐた人に逢へた氣がした。それは自分達と思ひを同じとする人々が、万難を排して集つて來た時の感激でもあつたが、躊躇することなく、手を握つて久瀧の挨拶を交したのである。それがきつかけで



彼はちよいと遊びに来てくれた。順一は背の高い、あまり目立たない顔付で、別段特徴もない人間ではあつたが、獨り者にありがちな、歪みも、すれっからしもないのに好感が持てた。千代が驚いたのは、三十に近いと見える彼が、実は千代より一つ年下であつたことである。身寄りも持たないと言ふので、珍らしい一寸とした料理を作つた時など、千代一家と一緒に御飯を食べたりした。暇を利用して、カーテンを作つたり、テールクロース等を作つてやつた。そんな何でもない交際が續いた或日――順一へ借してやる雜誌へ手紙を挟んでよいた。順一はいつまでたつても、四角張つて千代へ挨拶したり、何か作つてやつても恐縮ばかりしてゐるので、打ちとけて下さい。貴男は私の家族の一人だと思つてゐます。もつと親しみのある交際を望んでゐます。と言ふ意味の文面であつた。取りやうに依つては、どうにでも取れる文意であることを承知で、千代は書いたのである。順一を對照にもつと親しく交際しく見え、好奇心が動いてゐるのは事實であつた。自分より年下である事に考へ及んだが、一緒に散歩する位では、構はないおやないかと、甘い冒險がしてゐたのである。その返事は千代と同じ方法で歸つて來た。美しい文字で、彼も亦千代と同じ氣持である事を、正直に告白してゐた。やゝほりさうであつたのかと、千代は一人で微笑んだのである。それから二人は、別の意味での交際が始つた。順一は千代の仕事場へ遊びに來たり、千代の家以外の處で逢ふやうになつた。互が違つた氣持で面を合はせてみると、



平気で思つた事が言ひ盡し、終へない、どれつたさ許り感じるのである。内氣な  
順一は、それがひとかつた。千代の顔さへ、まともに見ようとせず、まごついて  
ゐるのである。そんな時、千代は反對に落着いて來て、滑稽なものを感ぜたりし  
た。順一が、彼の激しい情熱を日記文にかいて、千代へ送つて來始めると、千代  
もそんな文學的なことが好きなので、欠かさず返事を書いた。彼が一人で、カン  
カン平行線よから延び上つて行く氣持が、千代には手に取るやうに知れた。大体  
に於て、二人の間には、續く限り文學的に清い交際をしよう、と言ふ目的を置  
いてゐた。絶えず、手紙にも書き、逢つて口にする言葉であつた。これは順一  
が提唱したのであるが、千代も百パーセント共鳴してゐた。單にありふれた戀愛  
道を行くより、もっと高い精神的な道がある事を信じてゐた。世によくある行過  
ぎた戀愛へ、千代は激しい憎悪を持つてゐた。順一との交際も、そんな氣持から  
スタートしたと言へよう。第三者からは、眞実性の乏しい空論と、攻撃されさう  
な千代の主張も、彼には解つてもらへさうに思つたのである。單に風變りな男と  
言ふだけでなく、嬰兒のやうに澄んだ魂を持つてゐるのが、彼のまごちない表現  
に、よく滲み出てゐた。然し、いざ、彼を結婚の對照として考へて見る時、嫌ひ  
ではないと言ふ事は、好きだと云ふ意味にはならないし、嫌味がなくて、溫順し  
いといふ事は、一生を托する相手として、何の魅力もないのだと、考へるのであ  
つた。唯、精神的な順一は愛しても、現實に生きてゐる順一は、別個の問題で、



それをどうしようといふ野心は持てなかつた。

或る初春の寒い晩――誘れて、高校の展覧会へ行つた。歸り道寒くて、やりきれないので、順一のオートバコートの中へ入って歩いた。千代が、陳列品の感想なを話しかけても「ウン／＼」と妙に氣のない返事許りして、話相手になつてくれなかつた。暗いフアイヤーブレーキを横切る時、彼はいそいで歩かうともせず、わざと、速廻りし始めた。千代はかうした場合、沈黙は禁物だと氣付いて、息をつかずに喋り立てた。千代の肩にゐいた、順一の手は、次第と重味を感じると、本能的に、スルリとオバコートから抜け出てゐた。「私、暑くなつたわ」と突差に口をついて出た胡魔化しであつた。やつと道路に出て、いつものやうに手を握つて、「有難うね。スツドナイ」を別れた。順一は何も言はないで、フルリと背を向けると、大股に歩いて消えてしまつた。思へば、それが結局、順一との最後になつたのである。千代は家に歸つてから、黙つたまゝ後をも見ずに歩いて行つた。彼の姿は、何を意味するのか、考へて見た。それは二人とも同じレベルの興奮であつたのだ。然しそれを、とてもしーじーに乗切れた自分に、言ひ知れぬ優越を感ぜたのである。決して、彼への輕蔑ではなく、自分の憧れとする「崇高」なものに、貫き通せたる自分を意識することが、千代の胸をふくらませてくれたのである。千代は、自分の態度が、まさか彼へ、それ程の打撃を與へるものとは考へなかつた。彼が迷ひて行く事をも想像をにしなかつた。その次の土曜日、彼は太



底土曜日の夜遊びに來てくれるので、コーヒーの用意をしたり、ケーキを切つてゐいた。少し澤目に頬紅をつけ、彼が何と言ふを知らうと鏡を見て笑つてゐたのであるが、九時になつても來なかつた。珍らしい事もあるものだと、机に凭れてハイネ詩集の活字許り追つてゐる千代は、病氣を寢てゐるのなら、彼の宅を訪ねてみる楽しい空想に耽つたりした。翌々日、思切つて訪ねてみようかと、考へてゐる時、ツラツクを働いてゐる彼を見て、少し驚いた。が、元氣であるのなら、次の土曜日には、頭を掻き乍ら來るに違ひない位ひ、高を括つてゐる。それも仕方であつた。ブラツクの映画へ一緒に行くプランを作つてゐる千代は、腹が立つた。神経質を几帳面な性格の順一から、二回も待たボケを喰はされてみると、何か暗いものを感ぜたが、そんな非難めいた、考へを抱くのは怖い氣味した。物事を悲觀的に考へようとする、悪い癖が始めなのを、強ひて落着いて手紙を書いた。二週間の苦しみを誇張して書き並べ、是非今度の土曜日には逢ひたいと結んでゐいた。感激家の順一からひ、千代流の文章で、どうにでもしてみせる自信があつた。愈々三週間の土曜日のく番と、千代は落ちつきなかつた。もし今夜彼が來ないとしたら、前以て覺悟せねばならないものを身近かく感ぜるのである。八時を廻つて山靴音一つしなかつた。レーズの編物を目茶苦茶に、すいては戻し戻ししてゐるうちに、ジツトリと額に汗を滲ませゐる。机時になると全ては終りだと思つた。彼のため飾つてゐた机上の花を引きよせると一つ一つ、指先で



千切つて、ストーヴに投込み、ベッドに行つて、ふんぞり返つた。「バカノ」と  
聲を立て、咳くと、本當に、三週間もホンヤリ待つてゐた自分の友人好しが、馬  
鹿ノ／＼しく思へた。そしてはつきり、順一が去つた事を感じたのである。順一と  
の別れとは、もつと悲しいものだ、彼と交際してゐるうちは思つた。然し目の  
前に、持出されてみると、それ程悲しくはなかつた。千代にも不思議な現象に思  
へるのだが、三週間といふ期間が、すつかり土臺を作つてくれたものだとも考へ  
られた。

其様にまづい別れ方をしたのは、千代にも、いゝ氣はしなかつた。彼のやり方  
は男らしくないと、一應は心を攻撃してみたが、それも日數の問題であつた。い  
つとはなく、彼にはかり責任を買せられるべき筋のものではない事に考へ及ぶ  
ようになつた。千代の、投道りな、そして遊戯的な、行き方は充分非難されても  
よいと、素直に認める心になれた。そう思へば、彼との間が綺麗になつたのは、  
二人の爲に幸であると思ふのである。小さい問題にこどはつてゐるよりも、まだ  
／＼大きな、なすべきものが、それ／＼待つてゐるのだ。延々と生きて行く身輕  
さ、千代は久しぶりに咲いた氣がした。それは取りも直さず、順一の姿を美し  
いものとして、胸に止め置く、最善の方法だと思つたのである。





# 出發前夜

廣小路 敏雄

外は微風が吹いてゐるらしく、半年程前アーカーサス河畔から家の前に移植された楊の葉がさら／＼と柔かい感じのする音を立てゝゐるが、部屋の中はちつと坐つてゐても腰の下にべつとりとした気味の悪い汗をかきやうな暑さだつた。窓の下では限られた生命に足掻きするやうに夏の虫が哀愁的な音楽を奏でてゐた。やつと春夫の荷作りの手傳ひを済ませた時子は、もうスリッパースの中につめるものはなにかと、新聞や屑紙などで所きらは手取散らかされたルームを見廻はした。全部一める物だけはつめてしまつたと見定めると「では待つてゐますから、後からいらしやい」と言ひ残して歸つて行つた。春天は二週間も前からツールレーキに送られるといふ



ことは判つてゐたのだから、ホッ／＼と荷造りでもして仕度をしてゐたら、こんな時子にまで手傳つて貰ふ程な慌しい思ひをしないで済んだのだが、性来どんな事をするのにも、最後の土壇場まで来なければ身体を動かさない春夫であつてみれば、此の足許から鳥が飛立つやうな慌しい荷造りも成程とうなづかれるのだつた。その上一緒に住んでゐる、矢張りツールレーキに行く事に決つてゐる学校時代からの友達である和男までが、なかなか身体を動かす男ではなく、春夫と同じやうに二進も二進も行かなくなるまでとつしりと腰を落付けて時が来るのを待つてゐるといふやうな性質の男であつた。それが永井五日前、フレイツを出すのに後二日しか日限がないといふ時になつて、春夫も和男も同意でだし、政府から配給された板を薪を造り、その薪になんでもかんでも、白ふに行つてから直ぐ必要でないと思ふやうなものを端から手當り次第に放り込み、たつた一日でフレイツの荷造りだけは済ましてしまつた。二日後にはバゲージを取りに来ることになつてゐた。春夫は二月も経つてゐる洗濯物が氣になつて仕方がなかつた。余程時子に頼まうかと思つたが、今更身廻りのものだけに心配かけをくなくと保つてきた自分の態度を最後になつて崩したくはなかつた。春夫は仕方なく、バゲージを取りに来る朝、まだ薄暗い五時前に起きて、寝不足の目をこすり／＼洗濯をした。そしてその日のうちに時子にアイロコをして貰ひ、次の日にはバゲージ／＼として送り出してしまつた。バゲージの荷造りは時子が女らしい細かいとこ



るまで氣を使ひ「あればこ様出るから、これはこはれないから」と一人でしてくれ、明日車中に持ち込もうとスワースまで荷造りをすませてくれたのだった。

不忠誠分子の隔離問題は六分前から、ギャンプの話題の中心となつてゐた。春夫も和男もその問題について全然無関心だったといふわけではなかつたが、聴聞会が開かれたから眞剣に現実の問題として考へるようになった。サニタアニタで日本行きをサイを春夫達がしたことを誰からか聞いてきた時子は、春夫の顔を見るたびに、「春夫さん、あんたツールレーキへ行くの？」と不安さうな表情で尋ねるのだった。「あ——まだハツキリと決まつてゐない」と答へると「なるだけだつたら、あんたが行かないことを祈つてゐるわ」時子は暗に自分の意志を春夫に示してから、春夫がどんな顔をするか、その表情から春夫の答を探索しようと試みるのだった。

サニタアニタから此のキャンプに来て、春夫と和男は一緒に住むようになった。から、今日まで、何んなことをするのにも相談してきたのだが、此の隔離問題については聴聞会の呼び出し狀がくるまで余り話をしなかつた。春夫も和男も此の問題については慎重な態度を取りたかつたのだった。すくなくとも自分達の一生を左右する重大な問題であつてみれば、一時的な感情に支配されて、将来自分達が後悔するやうなみにくい輕卒な眞似はしたくないと思つてゐた。だから春夫も



和男も、自分一個の誰からも仲介を受けない自由な立場になつて此の隔離問題を熟慮してみたいと思つてゐた。

何時終るか戦争の見送しはつかない。その豫測の許されない戦時中外部との連絡を遮断され、不忠誠として隔離されることは打算的にみたら確かに不利な立場であるに違ひない。多くの機會がありながらも、自分から拒んでおかないのと、おたくてもおししてくれないのでは、結果の上からは同等であらうが、感情の上からは大きな差がある筈だ。自分から拒んでおかないのは優越感があるが、おししてくれないのには行動を制限されたといふ精神的な苦痛が伴ふ。果して、何時終るか判らない戦時中、自分にこれらの苦痛に堪えて行くことが出来るだらうか。春天はそんな事考へてみた。

そしてまた、米国に永いことゐて、自分の感知しない中に多少なりとも、米国の民主的な思想に感染されてゐる自分の思想が、数年間自己といふものを棄て、死のやうな苦難の道に堪え忍んできた故国の人々の思想について行けるだらうか。又日本に歸つてからの生活は——春天には自信がなかつた。歸つた當座は、日本に両親があるからそれ程でもないだらうが、獨立して自治の道を立て、行くとなると、やはり心配だつた。どの方面の仕事に適するといふ可能も自信も持ち合せてゐない自分自身を春天は良く知つてゐた。生活の自身が無いと言ふことは、自



分の無能さを暴露する書であり、悲しいことであつた。現在不自然な生活状態を  
續けなければならぬ立場にある春天にしてみたらその様な將來の深刻な問題は  
考へたくなかつた。だがツールレーキに行く事が日本へ帰る前提であつてみれ  
ば、やはり考へない訳には行かなかつた。そして日本へ歸つたら「どうにかなる」  
と云ふ様な樂觀的な氣持ではなく、現実の問題として眞剣にその悩むと取組んで  
みたかつたのだ。

春天はこの事について数日間悩みつづけた。色々と考えてみた。戦時中自分の  
良心にそむいて外部に働きに出る意志を持つてゐない春天は、思想あるものは自分  
が抱いて来た信念といふ様な意味から言つても、自分がツールレーキに行くべき  
人間であることを知つてゐた。知つてゐながらも、いざ實際にそれを実行に移す  
かと云ふ問題になると矢張り悩んだ。春天は、自分の將來が何う変化して行くか  
解らないこの問題を、日常の茶飯事の様に簡単に片付けたくはないと思つたのは  
事實であつたが、その他にも原因はあつた。最近急に友童以上の好意を示してく  
れるやうになつた時子の態度に春天は何かしら懸かれるものを感じてゐた。時子  
のふつくらとした真綿を包まれた様な、如何にも純なふらふらしい愛情を身近に感  
じるたびに、春天はやさしい愛の抱擁をもつて時子の心情をいたはつてやりたい  
と望んでゐた。若し自分がこのキャンパスから時子の反對を押し切つて去つて行つ



たら、時子はどんなに悲しむだらう。できる事だつたら愛する時子にだけは、こんな人生の淋しい悲しさは味はせたくないと春夫は思つた。そんな事を想像するたびに春夫の心は妙に淋しい感傷に捉はれてしまつて、右とも左とも決定しかねてゐる気持が余計迷つてしまふのだつた。

和男は和男でやはり此の問題で悩んでゐるらしく、立退前世話になつてゐた小田さんの所になど行つては相談をしてゐるらしい様子をつた。春夫は何時まで経つても去就に迷つてゐて、決心のつかない自分自身にいらだたしい様な感情を持つようになつてゐた或日、ホリスから一夜の聴聞会の呼び出し状が配達された。和男にも来てゐた。ホリスは顔見知りの男だつた。

「武藤君、どう／＼来た」

「やゝ、檢束状ですか」

そんな冗談を言ふながら、春男は、自分でも意外な程輕々しい気持でホリスからの呼び出し状を受取つた。春夫の決心はまだついてゐなかつた。だが明日に立つたら自分の採るべき行動の最後の回答をしなければならぬ。そんな時呼び出し状を受取つたのであるから、春夫の心は波立つ筈であつたが、春夫自身でも不思議な程気持は落ち着いてゐた。ホリスから呼び出し状を受取つた瞬間、この數日間悩み續けて来てゐた解き得なかつた難問題の答を探し求めた様な感じを味ふのだ



「た。これは垣上にのせられた鯉のやうなものであつたかも知れないが、高い所から下りて来る指令に對して反抗するといふ様な反送的を感情ではなく、ながいこと迷つてゐて、探し得なかつた眞実の自分の姿を發見し得た、と言ふ喜びに近い感情であつた。」

春夫達が當局から、九月十六日に「イルレーキ」へ行け、といふ通知を受取つたのは九月に入つて間もない頃だつた。春夫はその通知を持つて、直ぐ時子の家へとんで行つた。時子の親達は留守だつた。時子はカウチに坐つて一人で表紙の破れてゐる日本雑誌を讀んでゐた。春夫は黙つて時子に通知を渡した。時子は顔を上げ春夫の顔を見たが直ぐ下を向いて渡された紙に眼をうつした。

「春夫さん、これ本當なの？」

時子はびつくりしてゐる様な表情で聞いた。春天の悪質のいたづらであつてもいい。之が偽であつてくれれば——そんな眼つきであつた。だが春夫が黙つてカウチに坐つてゐるのを見て、

「やつぱりあんた本當に行くのね」

と下を向いたまゝ、林しそうな聲で言つた。

「仕方がなかつたんだ」

「春夫さんはそれでいい、として、あとに残される私どうしたらいいの」



時子の氣持を考慮に入れなかつたわけではないが自分に起きた変化を一時も早く知らせた人として来た自分の迂闊さが後悔されてならなかつた。これでは自分が親切と思つてした事が、まるで時子を苦しめてゐるやうなものぢやないか、春天はそんな氣持に襲れてきた。時子は心なしか涙ぐんでゐるやうだつた。

僕も色々苦しんだが、僕の赴る道はこれより外になかつたんだ。それと君にはすまないと思つてゐる。

「いゝえ、私あなたをせめるつもりではないけどたゞ自分が可愛相で――」

時子は顔を膝の上のせて泣きだしてしまつた。なんと言つて慰めていいか、春天にはわからなかつた。自分の目の前で悲しんでゐる時子を見て、春天の氣持も心に感傷的になつてゐた。しばらく悲しんでゐた時子は顔を少し上げて

「當は私モツルレーキに行きたかつたの、でもお父さんが反對なものをから、

時子はそれだけ言ふと、また悲しみを思出した様にうつぶしてしまつた。深く、

秘められた時子の愛情を打明けられたやうな感情をたつた。春天の胸にぐつと熱い

ものがこみ上げてきた。時子の肌目の細い白い襟首が眼に強く反射してきた。心

は波立つて息苦しくなつて来た。顔に血気が上つてくるのを感じた。カー杯抱き

締めてやりたい様な衝動に駆られてきた。不意に春天は立上つた。僕帰るよと怒

つたやうな声を發して春天は時子の家をとび出してきた。

それから二人は何處へ行くのにも一緒だつた。朝飯に減多に起きたことのな



い春夫だつたが、それ以來必ず起きて、時子と連れ立ってメスへ行つた。だが此のキヤンプに残る時子には、世間態もあるから頻繁に一緒に歩く事は遠慮しようと思ふこともあつた。そして自分は近く去つて行く人間である。自分が去つたあとの時子の悲嘆の大きいことを想像したとき、今からでも徐々に遠ざかつて行つたなら、自分と別れた後の時子の悲しみもそんなに大きくあるまい。そんなことを想ふ春夫でもあつた。だがそんな事を意識したたら余計気分はいら／＼してきて、家になつとしてゐられない春夫だつた。時々それでも、我慢して家にゐた。そんな時時子の方から訪ねてきた。荷造りの時春夫や和夫が轉手古舞をしてゐるのを見て、時子は朝から春夫の家にきて手傳つてくれた。春夫達が此のキヤンプに居られるのも今夜が最後の晩だつた。春夫は時子の親達から、今夜はお名残りを惜しみたいからと招はれてゐた。八時に行くと約束だつた。時計は五分前を指してゐるが、何故か春夫は行く気にはなれなかつた。「待つて居りますから」と一寸前歸つて行つた時子の後姿がほかに林し／＼春夫の脳裡に刻まれてゐた。春夫にも時子と別れる林しさはあつたが、今迄荷造りや色々の忙しさでその気持も紛らされてゐた。それがするだけしてしまつた、といふ安心が出てくると同時に張りつめてゐた氣持がぐつと崩れてしまひ、その後から何とも言ひ表しようのない悲しさが胸にこみ上げてくるのだつた。春夫はこんな氣持で、時子の今夜のやうにうち



死んだ顔を見たらきつと泣きだしてしまふだらうと思つた。「行くのは止めた」獨  
 り言を言ひながら、去年このキャンフに来た時と同じ様にミーツも枕もないベ  
 ドの上に寝轉んでしまった。そして、去年の九月サンタアニタの假収容所から轉  
 住して来た當時、到底自分には馴染めさうもないと思つた此のキャンフに一年住  
 み、今では近所の人々とも親しくなり、殆んど離れ難い程になつてゐるキャンフ  
 からどうして自分が去つて行かなければならなくなつたかを考へてみるのだつた。  
 遠く國を去りながらも自分の魂の中に信仰に近いほどまでに強く灼きこまれてゐ  
 る一つの憧のため、このアメリカに永い歳月を送りながらも、尚その土地の風習  
 に親しめないで、轉々として所を定めず時代の反逆兒として流れて行く自分の宿  
 命に堪まらない哀愁を覺えるのだつた。その時「トントントン」とドアをノック  
 する音が聞えた。時子は何時も低く聞えるか聞えないくらゐに三つ叩くのだつた。  
 春天はベッドからはお上るやうにしてとひ起さた。

鉄	原	募
柵	稿	集

- 一 創作、隨筆、詩、その他
- 一 作品の取捨は編輯者に一任
- 一 原稿は一切返還せず
- 一 住所氏名明記の事
- 一 宛名は一。一B「鉄柵社」編輯部





書き下し  
長篇小説

時代

第二章

樋江井 良二

日曜日の朝食がすんで河村は家を出た。九月に入つて幾分涼しくなつた朝の空  
気は心地がかった。行かう行かう思ひながら、なか／＼行かうとしないだらしのな  
い彼も、氣候の快さに動かされそのせらう。キヤンプの端から端の出口さんの家  
もとほど遠いとは今朝は感じられない氣持の輕々しさを感づいた。出口さんの家はび  
っくりする程きれいに片付けてゐた。ぴか／＼光るリノリアムの床をミセスは  
素足を歩いてゐた。アイオンウッドや、モスキッドの置場で部屋中は一ぱいに飾  
られてゐる。部屋の真中で、机に向つて出口さんは何か書きものをしてゐた。  
「まあ、よくいらつしやいました。行かう行かうと思ひながらつひ矢礼して、こ  
の前伺つたけむ合増留守でしたやうでしたから」  
といつてミセスは心より彼を迎へた。

「本の事を参つたのですか」

「まあ／＼わが／＼来ていたでい」

河村はすゝめられて子エアに腰を下した。彼は出口さんに本を賣りに來たので



ある、彼が働いてゐるアートデパートメントへ晝を學びに来てゐるミセスは、彼が「光明の道」の本をたくさん持つてゐることを知り、ミセスの主人が「光明の道」の非常な信者であり、「光明の道」の読友会を出口さんが主体となつて組織してゐるのであり、河村は本を拝借出来ないものかと頼まれ、現在では余り必要でない十幾冊かの「光明の道」の書籍を、二ヶ月程前から出口さんに貸してゐた。それが、二週間程前出口さんに会つた時、拝借した書籍を読友会に貸してゐるが、本を大切にしない人が多く、借りた本が傷み、ひどいのになると、本が行衛不明になつて歸つて来ない。それで、私の責任上あの本を譲つて戴けないでせうか。それに河村が一月後には隔離して行つてしまふことが決つて、借りてゐる書籍の處置をつけねば、といふ話で、彼としても、まあどつちでもいい。あまり必要な本でもないのだからと、その時返事をしておいたが、一週間程前出口さんが彼を尋ねて来たが、彼が留守で、かうして彼の方から出向いて来たわけだつた。夫妻は、冷茶やフルーツをもてなして、彼に色々と、「光明の道」について話して聞かせるのをした。ぼつ／＼と自分の言葉に陶醉して話してゐるやうに聞こえる出口さんの話を聞いてゐると、河村は次第に睡くなるのをした。あなたは若いに似合はない宗教心の目覺めた感心な人だ、こんな言葉以上の空で聞える。「光明の道」の全集を友人に勧められて讀み始めたのは三四年前の事で、十七八の河村には、大して深いなやみがあつたわけではなく、神經衰弱氣味にまで讀書慾の盛んであ



つた彼が、一種の好奇心から十幾冊かの全集を讀み留つたのであり、現在では宗教書など見向きもしやうとしない彼であり、決して悟つたので、感心を青年でもなかつたのだ。腹の中でこんなことを考へてゐた。二人の息子を共に出してゐる私はせめてもの老後の樂しみにかうして光明の道の信者となつて、人さまに話したり、本を貸ししたりして慰め合つて唯一の仕事としてゐるのです。と六尺近い出口さんは小さいエアーに丸くなつて、つぶやくやうに話すのを、時計は十時を少し廻つてゐた。早く目的の話を解決をつけて彼は歸りをつた。然し自分から進んで話し出す勇氣もない。出口さんは次から次へと光明の道のありがたをじんわりと語る。お茶を飲んだり、菓子をつまんじりして、彼は怠屈を忍ぶのに一生懸念をつた。朝の涼しさも消え失せ、暑さが次第に益してくる。

「では、いくら押して頂きませうか」

怠屈した彼の様子を感ぜたのか、出口さんは少し大きな聲で話しかけた。怠屈をつかれを氣持で彼はひやりとした。

「ごめ、別に私として」

彼は曖昧な返事をした。本を賣つた経験のない彼には、いくら貰つていいか、つぱり見當はつかなかつたし、まあ定價の半額位貰へばいいだらうと思つていた彼ではあつたが、口には出さなかつた。

「此處にお借りした本のリストがあるんですが、これを見ると、全集が十一冊、それに草稿本が五冊、全部で十六冊となつてゐますが、」



彼は黙つてゐた。與へられる金額を貰つておかう、と横着を考へだつた。

「この前も、ある日本の師範生の女の誼友の方が、二三冊本を持つて行かれ、その本を譲つて貰ひたいと、あなたの方へ行かれたさうで、あなたが留守だつたさうです、假りに師範生ともあらう人が、私に黙つてあなたから本を買はうとされる氣持が解りません。一旦お借りした以上全責任があり、私を通じてあなたにお願いするのが至當な事位常識でせうにお

定然出口さんはこんな事を言つた。河村は別にその人のした行為が非常識なものであると思へなかつたが、別段辯護もしなかつた。暫らく沈黙が續いて、一寸氣不味い格好だつた。

「勘定していただきたいらどうです」

ミセスが言つた。

「いや、僕は……」

「ギヤンプ ツーにも光明の道の誼友会がありますか、松本さんといふ人が、羅府から全部本を取り寄せられて、半額で賣つてゐられるさうです」

出口さんは言つた。

「私も大して金がないんですが、人さまの爲ですから、少々犠牲は惜しまないつもりです」

「僕も賣るつもりはなかつたんですし、キープして置くつもりですが、あなたがお望みなら別段必要を本でもありませんからお譲りしてもいい、と思つたんです」



羅府で定價の半額で買ったんですから、それに僕ももう讀んでしまつたんですか

「河村は辯解がましく速べえ。」

「それでは、いま本を買はうとしても買へないんですから、廉いかも知れませんが、あなたの方の辨はれた代價だけ戴いたらどうです。」

と三セスが出口さんに話しかけた。出口さんは黙つてゐる。三セスげ立上つて紙と鉛筆を持つて来て、「これで計算してみて下さい。」と言つて河村に渡した。河村はしばらく躊躇してゐるが、思切つて鉛筆を受取つた。かうしたことにいつまでも拘泥してゐるのは嫌だつたし、早く帰りたい氣持で一はいだつた。河村は本を一冊一冊開いて見て定價を調べ、計算し始めた。そばでそば／＼と落着かない素振りの出口さんを一寸感したが、氣にもせず計算を始めた。外に出てゐる本が四五冊あつた。然し定價は知つてゐたから聞きもしなかつた。突然出口さんの聲がした。

「四五冊本も見えないやうですから、河村さん、どうですか、五冊お上げしては、不快な聲のひびきたつた。河村は面喰つてしまつた。五冊とはひどいと思つた。「私は高いお金を拂つて無理にわけていただく程の身分でもないし、まだ他に安くわけてくれる人もあるさうですし、みんな人さまのためにしてゐることでずから、五冊だけ拂つていただきます。」

出口さんは早口に言つた。河村は豹変した出口さんの態度をどう解釋したもの



が判断に苦しむのだつた。彼は顔を上げ得ないでしばらく俯向いてゐた。むかむか  
かと腹底から押し上げてくる怒りを押へるのは精一はいかつた。

「まあ、あなたさういはないで、河村さん、勘定してゐらつしやるんですから」  
と周章で、ミセスは主人を宥めた。

「いや、僕はいくらでもいゝんです。五井で結構です」。

河村はちつと己を殺してつぶやいた。彼の顔は赤く歪んでゐた。

「なんだつたら寄附しても構はないんです」。

皮肉のつもりだつた。

「お前、財布を持って来なさい」。

と出口さんはミセスに命じた。

河村は本を戻して貰つて帰らうかと思つた。鉛筆をたたきつけてゐなつてや  
らうかとも思つた。でも金のくれかたが勘いからと云つて喧嘩するのは醜いやう  
に思へ、白ふの言ふまゝになつて、黙つて引下らうと決めた。然し彼の心は穏か  
ではなかつた。

「方や勘いければこれ取つて下さい」。

出口さんはミセスから財布を受取つて、くちや／＼になつた五井紙幣を取出し、  
のぼし／＼それを河村に手渡した。彼は黙つて受取つた。ミセスも黙つて見てゐ  
た。出口さんは又もとのに／＼顔になつて又光明の道の話に戻り始めた。しか  
し不自然な話し振りでゐた。三人の間にぎごちない雰囲気が増つた。河村はもう



一時もがつとこの家に留つてゐたくなかつた。

「それでは僕帰ります。正行魔致しました。」

河村が立上りかけると、出口さんは

「まあ——ゆづくりしてゆきなさい。」

と彼を止めたが、

「え、もう遅くをりますから。」

と帽子を取つて戸口に歩きかけると、

「そうですが、おどろ／＼来ていたをいてほんたふに済みませんでした。これをみんな喜びことでせう。ありがたうございすし。」

と頭をペコ／＼下けて愛想するのをった。

河村は急いで外に出た。後山見おにとつと歩いて行つた。太陽は頭上頃に照らしつけ、風一／＼ない空気は気だる／＼あたり一面に乾燥して漲つてゐる。

「俺はなぜわざわざこんなところまでやつて来たのだらう。」家を出るとき彼の明るさはみえなかつた。「光明の道がなう。悟りをひらいたやうなことをよくし圖々しく言へたものだ。あの狸舁め、立井なら立井とさせ初めから言はなかつたんだ。さん／＼人をじらしてゐて、馬鹿にしてゐるにちほひがある。何故俺はあの本を取り返してこられたのだらう。」

彼はぶつ／＼と鬱憤を寫へながら歩いて行つた。腹で腹で体の持つて行きどころのない不快さだつた。長いキヤンプの砂道を憤りに身を任せて歩いて来た彼で



はあつたが、出口さんに對する不快な感情が、彼自身に對しての嫌悪であつた事に氣付きはじめ、はつとするのをた。そして出口さんのみを責めやうとする彼のエゴイスチックな感情に氣付き、彼は一層自己嫌悪な陰鬱な氣持になるのをた。出口の人の態度は不快なものには異ひなかつたが、彼自身、不純な圖たさでありはしなかつたか。どうせ持つてゐたつて邪魔にしかならない宗教書を、好んで讀つて欲しいといふ人があれば、彼にはもつての機会であり、出来るだけ高價に賣つてやらうといふ下心を持つてゐはしなかつたか。かうした二人の打算的の醜さに觸れないで解決して仕舞ひたかつた問題だけに、まづ／＼と露骨に晒けだされるのはたまらないことだつた。

デツチの土手道を歩きながらいろ／＼と考へるのどつたが、結局不快な感情しか残りはしないのどつた。

それから一ヶ月程して河村がツールレーキへ隔離して行く時、出發の朝早く出口さん夫婦が彼を尋ねて来た。色々と別れの挨拶をして、出口さんは、これだけいけど取つておいて下さい、と言つていくらかの餞別を彼に手渡した。別れの握手をし、背の高い出口さんは、幾分腰を曲げるやうにして杖をつきながら、後を振り返り振り返り歸つて行つた。彼はしばらくかつとその後姿を見送るのどつた。





## 編輯後記

たかと何度も不平を言つたりしたが出来上つて見ると、やはり親切と言つた如き喜びを感じる。實際、原稿集め、編輯、印刷——よつほど物好きでなければ出来ぬもんではない。

▼オニ号を讀んで創刊号を残つてはゐないかと、ツルレーキ所氏の人でなく各セクターより問合せの手紙が来るが、既に賣切れ、讀者に満足の與へる事の出来をいのを残念に思つてゐる。だが、「鉄柵」が單にこのセクターのみの雑誌でなく各方面に進出した事を嬉しく思つてゐる。

▼「鉄柵」発行の許下を貰ふべく今日まで色々に盡つた諸氏及び文芸に理解す

る處置を採つて下さつた組合に感謝したいと思つてゐる。

▼投稿の中には佳作がある。紙数が限られてゐるので、この度は発表出来なかつたが噴を遡つて発表するつもりである。

▼作文には個性のあるのを載せたが、ページの都合で三つしか採らなかつた事を詫ぐる。

▼誤字がないやうにと色々氣をつけたつもりでしたが、刷つて後見るとやはり處々にある。日本語を勉強してゐる二世に對して甚だすまない氣がする。

▼今後けキヤンスの生活にも正しいメスを入れた批評を書くつもりである。

▼大城嬢がこの度休んだので、鉄筆は城本氏にお頼りした。感謝にたへない。

▼オニ四号は八月中旬に出る。



昭和十九年 六月廿五日 印刷  
昭和十九年 七月三日 發行

鉄柵第三號

發行者

鉄柵同人

編輯責任者

山城正雄  
野澤襄二  
河合一夫

發行所

鉄柵社

ツールレーキ

一〇〇一B



キールツ  
誌 雜人同